

令和7年度

「多文化共生のまちづくりワークショップ報告書」

令和8年3月10日

岩手県県南広域振興局

富士大学国際センター

## 目 次

### I 令和7年度「多文化共生のまちづくりワークショップ」の概要と活動記録

1. 令和7年度「多文化共生のまちづくりワークショップ」の概要（西村）
2. 令和7年度「多文化共生のまちづくりワークショップ」の活動記録（関上）

### II 令和7年度のフィールドワークの概要と結果報告

1. フィールドワークの概要（関上）
2. フィールドワークに関する結果報告
  - 1) 第1回フィールドワークに関する報告（大森、富岡）
  - 2) 第2回フィールドワークに関する報告（持田、齊藤）

### III 多文化共生に関するワークショップからの提案

1. 多文化共生に関するワークショップからの提案（西村）
  - 1) 大学として行えること
  - 2) 地域で取り組むべきこと
2. 多文化共生のまちづくりに向けた富士大学の取り組み（西村）

終わりに 「富士大学多文化共生のためのワークショップをふりかえって」（中村）

#### <資料>

1. ワークショップ参加者の記録（西村・中村）
2. フィールドワーク参加者数と実前の質問案等（中村）
3. 「県南広域振興局と富士大学の多文化共生社会推進の取組に関する覚書(抄)」(中村)

#### ※本報告書作成担当者

中村良則（富士大学経済学部教授、国際センター長）

関上 哲（富士大学経済学部教授、国際センター副センター長）

西村 晋（富士大学経済学部教授、国際センター員）

大森優希（富士大学経済学部経済学科4年生）

富岡輝希（富士大学経済学部経営法学科4年生）

持田紗名枝（富士大学経済学部経済学科3年生）

齊藤裕希（富士大学経済学部経済学科1年生）

岩手県県南広域振興局駒木良彦主任、谷藤遙主事にはワークショップの企画・運営において多大の協力を得た。記して謝意を表す。

## I 令和7年度の「多文化共生のまちづくりワークショップ」の概要と活動記録

### 1. 令和7年度「多文化共生のまちづくりワークショップ」の概要

令和7年度の「多文化共生のまちづくりワークショップ」では、令和5年度ならびに令和6年度のワークショップの成果を受けて、実際に多文化共生を果たしている花巻市内の企業へのフィールドワークを行った。

令和5年度の取り組みでは①多文化共生とは何であるか、多文化共生を進めるために必要な視点は何か、②実際に行える取り組みは何かというアイデアを出し合い、多文化共生のアンケートを本学学生ならびに花巻市の高校生・一般市民を対象に行った。言葉の壁や交流の機会の不足などの課題が明らかとなり、「より交流の機会を増やしていくべきである」という提案に至った。

令和5年度の取り組みを受けて、令和6年度では、①多文化共生に対する幅広い知識の共有、②多文化共生に資する具体的な取り組み、③在住外国人を対象とする多文化共生アンケートを実施した。花巻市内の在住外国人へのアンケート結果から、日本の文化についてもっと知りたいと考えていることや、交流の機会を外国人側も求めていること、また、生活上の言葉の壁などがあることが明らかとなった。

このような調査の中で、我々、富士大学の学生と教職員が貢献できそうなことと、貢献するにはかなり難度の高い課題とが存在することが明瞭になった。課題があることは明らかではあるが、関与できそうな領域と関与し難い領域や課題が存在する。たとえば、医療通訳といった面で、在住外国人は問題を抱えている。医療通訳となると高度な専門性が必要であり、何かできるというものではない。他方、「相互交流の機会を増やす」などの面では、我々が関与・協力できそうな取り組みも多数存在する。

令和7年度のワークショップにおいては、過去2年間の成果を踏まえ、実際に、花巻市に在住している外国人、特に、東南アジアから来日している技能実習生や受け入れ団体・企業との交流をすることとなった。

交流する中で、彼らの課題や、富士大学のできることにについてより具体的に掘り起こされてくるはずである。つまり、フィールドワーク（実地調査）を通じて富士大学が地域の多文化共生に貢献することができる事柄を発見するという目的意識によって行われた。

6月の第一回ワークショップでは、多文化共生についてディスカッションを行い、具体的にどのような取り組みや交流を行うことが出来そうか、また、多文化共生についてどのような課題がありそうかといった内容でディスカッションを行った。7月の第二回ワークショップでは、奥州市国際交流協会事務局長の渡部様を講師に招いて、世界の食卓についてのワークショップを行った。

夏以降はフィールドワークとして、近隣の技能実習生と、技能実習生を受け入れている企業との実地調査と交流を行った。

8月は、第一回フィールドワークとして、除雪機生産高日本第一位の和同産業株式会社を訪問した。同社は従来から国際化に熱心な企業であり、海外販売の面でも、生産現場での技能実習生の受け入れについても積極的に取り組んでいる。技能実習生のグオンさん並びに同社管理課課長の鎌田様から貴重なお話を伺うことができた。また、近隣の企業と大学が協調できそうなアイデアについて情報交換を行うことができた。技能実習生の日常生活において苦労することや、楽しいこと、また、技能実習生の地域や日本への関心について、近隣の大学生との交流の意思についてお話を伺うことができた。技能実習生は、機会があれば近隣の大学の若者と交流してみたり、アクティビティに参加してみたりしてみたいと考えていることが明らかとなった。

9月の第二回フィールドワークでは、花巻市を中心に技能実習生の受け入れと教育訓練を行っている岩手国際経済技術協同組合を訪問した。同組合専務理事の山口様より、地域企業における人手不足や、技能実習生の受け入れについての厳しい現実を踏まえたお話を伺うことができた。日本が東南アジアの若者から選ばれ続ける国になれるかどうか、という点で決して楽観できない現状にある。ちょうど、来日したばかりのラオスとベトナムの若者多数が日本語や日本の法律や習慣についての事前教育を受けている期間に訪問させていただくことができた。ラオスやベトナムの文化について、また、来日する技能実習生の将来の夢や関心について、実習生から、直接、幅広い話を伺うことができた。また、岩手県で体験したほうがよい食べ物やアクティビティについてなど、技能実習生からの質問や要望に学生が応えることができた。ラオスやベトナムの若者と初めて交流した学生も多く、大変貴重な機会となった。

9月末に、第三回ワークショップにて、上記2回の実地調査・交流のとりまとめを行った。フィールドワークを体験した学生のプレゼンテーションと、提言報告を行った。また、2回のワークショップから得られたことや反省点、考えられ得る協力のアイデアなどを話し合うことができた。また、和同産業の技能実習生のグオンさんに教えていただいたベトナム食材店で購入したベトナム産飲料の試飲を行った。

10月11日、富士大学の「紫陵祭」にて、地域の方々を招いてプレゼンテーションを行った。フィールドワークに参加した学生が調査結果と提言を報告し、また、高校生からベテランまで、幅広い層の地域の方々からご感想やご提案をいただくことができた（調査結果ならびに提案内容は、本報告書において後述する通りである）。

令和7年度のワークショップは、3年間の活動の集大成であり、外国人との交流の輪を広げていくこと、ならびに、ワークショップの活動の場を学外に求めていくことで大きな成果を得られた。地域の方々と共に課題を考えることができ「多文化共生のまちづくり」という趣旨に沿った活動を行うことができた。

「多文化共生のまちづくり」をする中で、地域の我々は、また、富士大学は、いかなる活動で貢献ができるのか、また、地域づくりにおいてどのようなアイデアが考えられ得るか、というインプリケーションについては後述する。

## 2. 令和7年度「多文化共生のまちづくりワークショップ」の活動記録

2025.6.23 記

### 1) 令和7年度第1回多文化共生のまちづくりワークショップが開催されました

6月21日（土）令和7年度第1回多文化共生のまちづくりワークショップが県南広域振興局と富士大学国際センター共催で開催されました。

当日は、国際センター長の中村良則先生、県南広域振興局企画推進課長の高橋新吾様の両名より開会の挨拶がなされた後で、西村晋先生から「令和7年度多文化共生 WS の活動方向と課題」というタイトルで講演がありました。

今年度は、県南地域での多文化共生社会の実現を目指し、大学生中心に具体的諸課題の抽出と課題解決の方向性を見つけ出し、フィールドワークにおいて解決の方向性をより具体化しながら活動を実施してまいります。

特に3年目の「多文化共生のまちづくりワークショップ」は「富士大学を中心に大学生と県南地域に在住する外国人が若者との交流機会を広げることで、誰にとっても住み安く、有意義な街づくりを目指す」ことを目標に活動を展開していきます。

第1回ワークショップでは、多文化共生社会の課題として、ルールの壁、言葉の壁、文化の壁という3つの壁が具体的に抽出され、わかりやすいルールやマナーの掲示など互いが理解し合える方向性が示されました。今後の具体的解決のための活動が期待される充実した話し合いになったと思われまます。



## 2) 第2回多文化共生のためのまちづくりWSが実施されました

令和7年7月28日(月)14:30~16:00まで542教室において富士大学と岩手県南広域振興局主催の第2回多文化共生のためのまちづくりワークショップが実施されました。

今回の多文化共生のためのまちづくりワークショップは、奥州市国際交流協会事務局長の渡部千春氏が「ワークショップ フォトランゲージ 世界の食卓」というタイトルで初めに講演を実施いたしました。奥州市の国際交流協会の業務についての説明やその役割まで幅広くわかりやすく解説していただきました。市からの資金援助と市からの業務委託が約80項目あり、1年間でこなしているということを伺い、同協会の自治体での役割がとても良く理解できました。講演会後のワークショップでは世界の食卓の写真を見ながら、どこの国の食卓の写真かを当てる形式で実施され、13カ国の国・地域あてクイズにもなり、食卓に並ぶ食品群が国ごとに置かれた実情をととても良く反映していることが理解されました。

印象深かったのは、国が紛争や戦争状態であることが家族の食品群の写真の中に色濃く反映され、平和の尊さがあらためてこのワークショップから理解できました。

【第3回開催予定日】 令和7年9月24日(水)



2025.9.25 記

3) 第3回「多文化共生のためのワークショップ」が開催されました。

9月27日(土) 13:30~15:30、542教室で令和7年度 第3回 多文化共生のまちづくりワークショップが開催されました。

富士大学は、岩手県南広域振興局と共催で、多文化共生社会の実現と持続的発展を図ることを目的に「多文化共生のまちづくりワークショップ」を展開しております。

今年度の第3回多文化共生のためのワークショップでは、学生達による和同産業、岩手国際経済技術協同組合での技能実習生対象のフィールドワークでの成果を発表し、第4回WS(富士大学紫陵祭当日)での本WS全体の総括を含む発表内容を検討しました。

フィールドワークに参加した学生達からは技能実習生が日本に来日して感じた生の声に素直に反応し、異文化理解を深めるための講義や、やさしい日本語教室の開設、あるいは地域での多文化交流イベントの開催など、多文化理解啓発に向けた興味深い提案が数多く発表されました。

紫陵祭当日のWSでは高校生や市民の皆さまとご一緒に内容豊かな話し合いをしていきたいと思っております。参加は自由ですので関心のある方は是非WS会場まで足をお運びくださるようお願い申し上げます。

**【第4回開催予定日】** 令和7年10月11日(土) 10:30~12:00 544教室

#### 4) 第4回 多文化共生社会のまちづくりワークショップ報告

岩手県県南広域振興局、富士大学国際センター共催「紫陵祭」において第4回多文化共生社会のまちづくりワークショップが開催されました。

去る10月11日(土)富士大学紫陵祭で第4回多文化共生まちづくりのためのワークショップが実施されました。大学側からは富士大学事務局長大石仁雄氏、さらに岩手県からは県南広域振興局企画推進課長高橋新吾氏のご挨拶され、その後国際センターより令和5～6年度のまとめと今年度の総括が報告されました。

今年の活動は学生達による聞き取りが大きな活動であり、第1回和同産業、第2回岩手国際経済技術協同組合の技能実習生たちに対して実施した報告が学生達により報告されました。

日頃、学生達には日本の日常生活事で当然と思われていることも、海外より来日した技能実習生の方々には困難を極めていることが聞き取りの段階で明らかとなり、学生らしい「感性」の中で感じたことをアドバイスと共に素直に語られておりました。今後、県南地域にある富士大学として「すぐできること」や「将来に向けてできること」などについてもまとめてまいりたいと思います。

ワークショップの学生たちの中には、3年間多文化共生のためのワークショップに参加した学生や2年間活動に参加した高校生もあり、数年間の多文化共生ワークショップの活動の大きな成果が学生たちの発言により共有され、これから地域の大学を中心にした多文化共生活動は学生達を中心として実施されていくであろうと思われました。

また、来賓として参加された花巻国際交流協会事務局長藤原睦氏、和同産業管理課長鎌田征丞氏、岩手国際経済技術協同組合専務理事山口幸朗氏の方々より、聞き取り活動という地道な活動は地域づくりに重要な点であることが語られ、学生達の活動が大きな意義あるものであることが示されました。さらに、新入社員へ新人研修として日本語学習が今まで以上に必要だと思われるということが市民の方からも語られました。今後、企業や各種機関と大学は連携を取り、技能実習への活動を共に協力して実施する必要があることが明らかになりました。

本日のワークショップ活動は今年度中にまとめられ、3年間の多文化共生まちづくりワークショップ活動の報告集として編集され外部に発信されます。

今後とも、富士大学の多文化共生活動は学生・教職員を中心に自治体、関係団体、企業との連携を深め継続されます。今後とも関係機関からの温かいご支援をお願い申し上げます。



## II 令和7年度のフィールドワークの概要と結果報告

### 1. フィールドワークの概要

#### 1) 第1回多文化共生WSでのフィールドワーク

去る、8月23日(土)13:30~15:30和同産業(株)本社にて、多文化共生WSのフィールドワークとしてWS参加学生による同社技能実習生の方への聞き取り調査が行われました。

今年度は「多文化共生のためのまちづくりWS」としては3年目を迎えており、今回の活動は、花巻市内で生活されている技能実習生の方々が市内においてどのように多文化共生を感じておられるのか、今後学生がどのように関わられるのかを考えるための聞き取りでした。

当日は、和同産業の管理部管理課課長鎌田征丞様と当日業務の関係から技能実習生のD. H. CUONGクオンさんが聞き取りに応じていただきました。日本に興味を持ったきっかけは桜の花に関心があったことや日本のアニメが好きだったことなどが動機になっていたこと、日頃、健康のためにスポーツをしていることもわかりました。本人に伺ったところ、大学のスポーツセンター施設を利用したいとのことでした。また、「大学の教室に行ってみたい」、すなわち本学の授業を受けてみたいとの思いも口にされました。

実習生の方々は市内の花巻まつりにも積極的に参加していること、日常生活ではごみ出しの際の分別で苦労しているとお話もありました。2時間程のフィールドワークでしたが、学生たちにとっては今後の多文化共生のWSで取り組むべき活動方向について、大きなヒントを得ることができました。

今後も学生たちは、他の実習生の方の聞き取りを続け一層の具体的活動を模索したいと抱負を語っておりました。

## 2) 第2回多文化共生WSでのフィールドワーク

富士大学国際センター技能実習生への聴き取り

2025.9.9記

富士大学の国際センターでは、9月8日(月)午後岩手国際経済技術協同組合研修所において、本学学生達5名による2回目の外国人技能実習生(ラオス10名、ベトナム5名)達への聞き取り調査が実施されました。

当日は、岩手県の技能実習生の受け入れの現状について岩手国際経済技術協同組合専務理事の山口幸朗様より説明を受け、その後技能実習生の自己紹介に続き、学生達から技能実習生に質問がなされました。

いずれの実習生も日本に来日して1週間ほどで研修を受けた方々でしたが、自己紹介は片言の日本語や母国語をおり交ぜて国のどこ出身であるか、家族は何人であるか等を考えながら紹介しておりました。その日本語理解力にはとても驚かされました。

さらに日本は「ワンピース」などのアニメで知っていたことや、日本語の研修では漢字の読みがラオスやベトナムの研修生達からは難しいと聞かされ、日本の学生たちからは日本の昔話物語などを読むことで漢字が理解しやすくなるというアドバイスがなされていました。

また、日本食では、ラオスやベトナムでは麺類が多く食されることや、本国では辛い風味の麺類が食されることが多く、日本との共通の食文化を持っていることが実習生や学生達により確認されました。

さらに、富士大学の講義風景を見学してみたい、大学の施設が利用できたら嬉しいという話題も聞かれ、10月の学園祭に大学訪問を楽しみにしていることが明らかになりました。

以上

# 富士大学 国際センター 多文化共生のまちづくり ワークショップ 令和七年度の活動報告

西村 昌

## 過去三年間の本ワークショップの概要

- ▶ 岩手県南広域振興局と富士大学との共同WS。
- ▶ 岩手県南地域の多文化共生について調べ、そして、考える。
- ▶ 本年で三年目。
- ▶ 一昨年は地域住民の方へのアンケート調査を中心とする研究をした。
- ▶ 昨年は、地域の外国人の方へのアンケート調査を中心とする研究をした。
- ▶ その結果、外国人と交流してみるべき、また、その中で富士大学は何ができるのか、ということを考えるべきだということになった。

## 一昨年のワークショップでは

- ▶ 地域住民の方々と、大学生にアンケートを行い、様々なことが明らかになった。
- ▶ たとえば、...
  - ▶ 日常生活の中で少なからず、外国人について意識している
  - ▶ より交流したいが、交流する機会が多くはない
  - ▶ 言葉の壁、マナーの理解不足などが存在
- ▶ たとえば、...
  - ▶ 以上のことから、より交流の機会を増やしていくべきだという提案が導き出された

## 昨年のワークショップでは

- ▶ 花巻市の外国人にアンケートを実施し、以下のことがわかった。
  - ▶ 東南アジアから来ている方が多い。
  - ▶ 日本の習慣や文化を学びたい方が多い。
  - ▶ 生活する上で、言葉の壁が大きい。
  - ▶ 特に病院などでの意思疎通に困っている方が多い。
- ▶ 我々が関与できそうなことと、難しそうなことがある。
- ▶ 実地で交流して調査してみると、そのなかで、何ができるか考えていくことが重要であるとの気づきを得た。

## 本年のワークショップでは

- ▶ 一昨年、昨年のワークショップにて、アンケート調査の結果、実際に地域にいらしている外国人との交流を行いたいということになった。
- ▶ 特に東南アジアからの技能実習生と関わる。
- ▶ 交流する中で、彼らの課題や、私たちにできることについてわかってくる。
- ▶ フィールドワーク（実地調査）を通じて富士大学が地域の多文化共生に貢献することができる事例を発見していきたい。

## 本年のワークショップの流れ

- ▶ 6月、第一回ワークショップでは、多文化共生についてディスカッション。
- ▶ 7月、第二回ワークショップでは、欧州市国際交流協会の渡部事務局長を講師に招いて、世界の食卓についてのワークショップ。
- ▶ 8月、第一回FW 和同産業（具体的にはのちほど学生から）
- ▶ 9月、第二回FW 岩手国際経済協同組合（具体的にはのちほど学生から）
- ▶ 9月、第三回ワークショップで、二回の実地調査・交流のとりまとめ
- ▶ 10月、総発表

## フィールドワーク（実地調査）で 得られたこと

- ▶ 技能実習生の方が、日本に来る前から、日本の文化について少し触れてきたことが分かった。
- ▶ 彼らの困っていること、してみたいこと、興味関心が分かった。
- ▶ 本学学生にとっても得られるものが多かった。
- ▶ 実際に交流する中で、今まで知らなかったラオスやベトナムについて興味があった。
- ▶ 具体的には、これから三名の学生に報告してもらおう。

## 2. フィールドワークに関する結果報告

### 1) 第1回フィールドワークに関する報告（大森、富岡）

○令和7年度 多文化共生 WS 和同産業フィールドワーク報告

作成者 大森 優希

#### 1. はじめに

今年の多文化共生まちづくりワークショップの活動は、昨年度の活動の課題等を生かし、実際に花巻市内の外国人技能実習生を雇用している企業や技能実習生に対して日本語などの指導をしている施設を訪ね、学びを深めた。

今回訪問したのは、富士大学から車で5分ほどの「和同産業株式会社」様である。3年間多文化共生ワークショップの活動をしてきて、このワークショップとしての活動では、はじめての交流ということもあり、緊張していた。他方で、私自身は、講義やゼミにおいて、和同産業様には何度か訪問をして工場見学等を経験し、さらには社員の方々とも交流をしていたので今回のインタビュー調査はとても楽しみにしていた。

また、今回の訪問の目的、訪問先として和同産業様を選んだ理由として、「富士大学と和同産業様との関係構築、実際に勤務している技能実習生と交流し、実態を知る」という目的である。実際に技能実習生のクオンさんにインタビュー等で交流を深められたのは、このワークショップに参加する中で、たいへん大きな発展であったと実感した。訪問当日は、工場が休みで稼働していなかったため、実際に工場見学とはならなかったが、今回訪問したことをきっかけに多文化共生wsの活動を、和同産業と連携して活動をし、その一環で実際に技能実習生の働きを見学しながら工場見学という形に出来たら良いという話し合いができた。

#### 2. 技能実習生クオンさんへのインタビュー内容

##### 【質問と回答】

質問1：どのような思いで日本に来たのか

回答：日本のテレビなどを見て、日本の文化に興味を持った。

質問2：和同産業で勤務するきっかけは何か

回答：国際経済技術協同組合からの派遣であるが、元々は、ベトナムから日本で働きたいという思いがあり来た。また、ベトナムに居る時に和同産業の採用面接をした。

質問3：日本で暮らして大変だったこと

回答：ゴミの分別や、駅での他路線への乗り換え、ベトナム料理と日本料理の味付けの違いに困った。そのため、業務スーパーなどでベトナム料理を買って食べている。

質問4：和同産業で働いてよかった・うれしかったこと

回答：ベトナムの先輩や、同僚がいてうれしかった。

質問5：富士大学の学生と交流したいこと

回答：和同産業の庭でのバーベキュー会などの交流会や、市内の清掃ボランティア活動を和同の新入社員（技能実習生含む）と富士大生とで共同で行うことや、富士大学の教室や授業を見学したい。

### 3. 今回の訪問で得られた成果・知見

ベトナムの技能実習生クオンさんと交流した成果の一つといえるが、私と同じ年齢ということもあり、お互いすぐに打ち解けて話をすることができた。クオンさん本人が日本人や、年齢が近い我々大学生との交流に対してかなり意欲的であるという発見が、最も印象的であった。彼からは、実際に富士大学のスポーツセンターでフットサルを学生とやってみたいことや、講義等を一緒に受けて、日本人の大学生と仲良くなりたい・友達になりたいという話をうかがい知ることができた。

### 4. 今後のアクション・提案

今後の提案として、今回訪問した和同産業さんの技能実習生をはじめとする社員の方々と富士大学とで、様々なレクリエーション活動を実施することも、地域連携や地域企業と大学との連携という面においても重要なことであると考えられる。たとえば、富士大の紫陵祭で和同産業との合同の模擬店を出すことなどが考えられる。また、和同産業様の清掃ボランティア活動などに大学生が参加することなども一つの案である。

### 5. 感想

今回多文化共生のワークショップとして初めて実践形式の活動であり、私自身も緊張していたが、年齢も近く、クオンさんも日本語が通じ話することができる方であったので様々な質問や個人的な関心や興味にまつわる話をすることができた。

今回得られた成果としては、我々日本人よりも海外からきている技能実習生などの方々のほうが、多文化交流に意欲的であるということがわかり、さらには、年齢が近い者同士の他国の友達が欲しいということも得られた知見であった。

私が考える今後の活動としては、次のようなことが挙げられる。まずは和同産業と富士大学との連携を強化する。また、身近な多文化交流として技能実習生の方々と大学に招き交流する。

### 6. 2年間多文化共生ワークショップに参加しての一言

2024年度の活動としては花巻・北上地域の方々や、高校生も交えたワークショップであ

り満足したが、課題として、「多文化共生についての話し合いというよりも地域住民や高校生との交流会」になってしまっていたところが、課題としてあった。今年度は昨年の課題を生かし、富士大のみで、実際に技能実習生が勤務している企業などにフィールドワークを実施して、昨年よりも多文化共生に向けた大きな一歩となる活動であった。

来年度以降の提案として、今年度の内容を生かし、和同産業をはじめとする地域企業と連携した活動や、行政機関とも連携した活動も、より良い活動になると感じる。

※以下に 2025 年度多文化共生ワークショップ紫陵祭発表資料を一部抜粋で掲載



**今後の取り組み・提案・期待できること  
近隣の教育機関との連携**

- ▶ 花北地域に限定せず、県内の国際交流に取り組んでいる高校・大学・行政との連携を結び、共に活動していく。
- ▶ 新たな発想、取り組みの活動も拡大していくことにもつながると考え、より一層多文化共生が現実的になると考えられる。
- ▶ 特に、高校との連携を重視することで、生徒の進学先として富士大を知ってもらい、多文化共生WS参加者が入学後も活動を続けて発展させることが期待できる。
- ▶ ※実際私の母校、岩手高校では、近隣の大学と国際交流の活動をして、一定の成果が得られたと訪問した際に聞きました。

**今後の取り組み・提案①  
近隣の企業との連携**

- ▶ 今後の取り組みとして、今回訪問した和同産業株式会社の技能実習生をはじめとする社員の方々と富士大学とで、様々なレクリエーション活動を実施することも、「地域連携」や「地域企業と大学との連携」という面においても重要なことであると考えます。
- ▶ そこで、富士大の紫陵祭で和同産業様との合同の模擬店を出店することも考えられる。

今年のワークショップは、富士大生のみで活動したが、活動していく中で大切だと感じたのは、高校やほかの大学とも連携することである。たとえば、高校生であれば「富士大を進学先として考えてもらえる」きっかけになりえる。ほかの大学と共に活動すると、「様々な価値観を共有し活動できる」といったメリットがあると考えるので、来年以降はこのようにすることも参考に活動するとよいのではなかろうか。この 2 年間の活動は多文化共生を考える意義ある活動であった。

## 和同産業株式会社

多文化共生WSフィールドワーク報告

作成者 大森 優希

訪問日 2025年8月23日

### ・訪問先

所在地：岩手県花巻市実相寺410  
担当者名：鎌田課長、クオンさん

### ・訪問の目的・背景

- ▶ 富士大学と和同産業との関係構築
- ▶ 実際に勤務している技能実習生と交流し、実態を知る。

### インタビュー内容 回答者：クオンさん

- ▶ 質問1：どのような思いで来日したのか
  - ▶ 回答：日本のテレビ（アニメや紹介番組）を見て、日本の文化に興味を持った。
- ▶ 質問2：和同産業で勤務するきっかけは何か
  - ▶ 回答：国際経済技術協同組合からの派遣であるが、元々は、ベトナムから日本で働きたいという思いがあり来た。ベトナムに住んでいるときに、和同産業の面接をした。

### インタビュー内容

- ▶ 質問3：日本で生活していて大変だったこと
  - ▶ 回答：ゴミの分別や、駅での乗り換え、ベトナム料理と日本料理の味付けの違いに困った。
- ▶ 質問4：和同産業で働いてよかった・うれしかったこと
  - ▶ 回答：ベトナムの先輩や、同僚がいてうれしかった。
- ▶ 質問5：富士大生と交流したいこと
  - ▶ 回答：和同の館でのバーベキュー会などの交流会や、市内の清掃ボランティア活動を和同の新入社員（技能実習生含む）と富士大生とで共同で行いたいと鎌田課長から申し出があり、クオンさんからは富士大学の教室や授業を見学・参加したい、と申し出があった。彼はスポーツと文学に関心があると話の内容から感じた。

### 得られた成果・知見

- ▶ ベトナムの技能実習生クオンさんと交流し、同じ年齢ということもあり、お互いすぐに打ち解けて話をする事ができた。
- ▶ 最も印象的であったのは、クオンさんが日本人や年齢が近い戦々大学生との交流に対してかなり感銘的であるということ。
- ▶ 彼からは、実際に富士大のスポーツでフットサルを学生とやりたいことや、講義等を一緒に受けて、日本人の大学生と「仲良くなりたい」「友達になりたい」と語っていた。

### 今後の取り組み・提案① 近隣の企業との連携

- ▶ 今後の取り組みとして、今回訪問した和同産業株式会社の技能実習生をはじめとする社員の方々と富士大学とで、様々なレクリエーション活動を実施することも、「地域連携」や「地域企業と大学との連携」という面においても重要なことであると考えられる。
- ▶ そこで、富士大学の豊原寮で和同産業様との合同の模擬店を出店することも考えられる。

### 今後の取り組み・提案・期待できること 近隣の教育機関との連携

- ▶ 花北地域に限らず、県内の国際交流に取り組んでいる高校・大学・行政との連携を結び、共に活動していく。
- ▶ 新たな発想、取り組みの活動も拡大していくことにもつながると考え、より一層多文化共生が現実的になると考えられる。
- ▶ 特に、高校との連携を重視することで、生徒の進学先として富士大を知ってもらい、多文化共生WS参加者が入学後も活動を続けて発展させることが期待できる。
- ▶ ※実施前の母校、岩手高校では、近隣の大学と国際交流の活動をして、一定の成果が挙げられたと訪問した際に聞きました。

令和7年8月23日、私は本活動における初めてのFWに参加した。訪問先は本学から徒歩22分の距離に位置する和同産業株式会社様の本社である。2時間という短い時間ではあったが、外国人との交流という貴重な機会に参加できたことは、今後の人生の宝になるだろう。

ここで和同産業株式会社様について簡潔に紹介していく。この会社では除雪機・草刈機・農業機械の開発から販売を一貫して行っている。同社は除雪機生産高が日本一の会社である。1941年5月に創業しており、今年で84年目となる。岩手県花巻市の本社のほか北海道・栃木県・長野県・岡山県・熊本県の5か所に営業所を展開している。今回のFWで担当してくださったのは、同社管理課課長の鎌田様とベトナム出身で同年代の技能実習生のクオンさんである。

本題に戻り、まず今回のFWの背景と目的について述べる。背景としては、前年度のWSで、多文化共生の推進に向けて大切なことは地域に居住する外国人との交流であると結論付けたことである。

しかしながら、過去2年の本活動において外国人と交流する機会がほとんどなく、私自身も「多文化共生を推進したい活動なのに外国人と交流する機会がない」という状況に違和感を抱いていた。

今回の訪問の目的は、大学と地域の外国人との交流の在り方を調査し、多文化共生の実現に向けて私たちができることを考えることである。大学が地域の外国人とどのように交流していくべきかを調査し、多文化共生の実現に向けて考えること自体に意義があると考えられる。また、本活動を進める中で、私たちにもできることがあれば協力していきたいと考えようになった。

次に、FWでの質疑応答について触れていく。インタビュー相手はベトナム出身のクオンさんである。質疑応答の内容は、以下の通りである。

1：日本に来たきっかけは？

回答：アニメを見たことで日本に興味を持ち、文化（桜や雪）を感じたい

2：どんなアニメを見ていたか？

回答：子供の頃はドラゴンボール、最近は鬼滅の刃を見た

3：いつから日本のことを意識していた？その理由は？

回答：雪を見たいという理由から、高校生の頃に意識し始めた

4：雪の感想

回答：冷たくて面白かった

5：友人で外国勤務の人はどれくらいいたのか？

回答：学校全体で10～15人程度、仕事が多いが留学もいる

6：ベトナムで人気のスポーツは？

回答：サッカー、少ない道具で出来るため、少年時代に経験している人が多い

7：日本に来て困ったことは？

回答：ごみの分別、電車の乗り換え、料理の味の違い（日本は濃い目）

8：買い物について

回答：ベトナム専門店（北上）、業務スーパー（花巻）を利用・寮（他の実習生との共同生活）では自分の分だけ購入するルールが存在している

9：和同産業のいいところ

回答：社員が優しい

10：日本に来る前と後で変わったことは？

回答：時間を大切に（守る）ようになった

11：富士大生との交流について

回答：教室（授業風景）を見てみたい

12：日常生活の中で難しいことは？

回答：午前6時半に起きてお弁当作り（ベトナム料理）、冬の買い物（雪が降る・寒いから週一回になる）

13：地震について

回答：ベトナムでは少ない、実際に体験したが、それほど怖くはなかった

14：将来の夢は？

回答：ベトナムでケーキ屋を開く

15：来日前にしたことは？

回答：地震、岩手県、花巻祭りについて調べた

クオンさんは、高校生の頃に日本のアニメや文化に触れたことがきっかけで来日して働きたいと考えるようになった。来日後は、ごみの分別や早起きして弁当を作ることなどに苦労しながらも、地元でケーキ屋を開くという夢に向かって努力している。現在は、優しい社員の方々に支えられながら、冬の寒さに負けず日々の業務に励んでいる。

今回のFWを通して、5つの気づきがあったので、以下に整理して述べる。

1：企業や外国人が「学生や大学とのつながり」を望んでいることが分かった。

クオンさんも富士大学の授業を体験してみたいとおっしゃっていた。このことから、大学と地域住民との交流を促す必要があると感じた。

2：「言葉の壁」への対策が必要だと感じた。

実際に、和同産業様においても社員同士の交流は当初大変だったため、現在は社員向けに週2時間の英会話教室を開催しているとおっしゃられていた。

3：「やさしい日本語」の難しさを実感した。

やさしい日本語とは、普段使っている日本語を外国人にもわかりやすく表現することである。質疑応答の中でも「日常生活で嫌なこと」を尋ねようとしたが、うまく伝わらなかったため、「日常生活で苦労していること」に変更した。日頃からやさしい日本語を使うことで、地域住民の多文化共生への意識を高める効果があると考えられる。

4：「外国人との交流」という貴重な機会に参加できたことは、有意義であった。

日常生活では、本学のサイモン先生以外の外国人と接する機会はほとんどないため、この経験は自分にとって「大切な財産」になると感じた。

5：日本のアニメの知名度の高さに驚いた。

子供の頃にドラゴンボールを見ていたという話を聞き、日本のアニメが世界的に広く知られていることを改めて実感した。

今回のFWで得られた知見を踏まえて考えた、多文化共生の実現に向けた提案を以下の3つの視点で述べていく。

#### 1：地域住民の視点

地域住民の国籍に関わらず積極的に交流できる場を設けることが重要である。目的は、地域住民同士の交流を活発化させるとともに、地域特有のルールを理解してもらうことである。例えば、地域の祭りで母国に関する屋台を出店することで、住民との距離を縮めることができると考えられる。

#### 2：富士大学からの視点

まず、花巻・北上市に居住する外国人を対象に学内見学や授業体験を実施することが考えられる。地域の外国人の中には、本学について知りたいと考える人もいと想定される。次に、本学の一大イベントである「紫陵祭」において、企業や地域の外国人との共同企画を開催することで、大学と地域との距離を縮めることができると考えられる。これらの取り組みは、来年度から継続的に実施することが望ましいと考えられる。

#### 3：行政からの視点

日本と海外の文化を同時に学べる体験型イベントを開催することが重要である。多文化共生を進める前に、文化を理解してもらうことが前提となるからである。また、ポイ捨てや騒音など、外国人に関する問題に対して、ルールや施策の検討・実施を行うことも必要である。

最後に、今回のFWの機会を設けてくださった中村良則・関上哲・西村晋先生、県南広域振興局の皆様、そしてFWにご協力くださった和同産業株式会社様、当日対応してくださった鎌田様、クオンさんに心より感謝申し上げます。

多文化共生WS (ワークショップ)

第1回フィールドワーク 報告

**「和同産業株式会社」**

訪問日 2025年8月23日(土曜日)

報告者: 富士大学 経済学部 4年 富岡 輝希

和同産業株式会社 概要

事業内容  
除雪機・草刈機・農業機械の**開発～販売\***を一貫して行っている  
\*:**開発→設計→製造→販売**のこと

事業所 (本社のみ)  
岩手県花巻市実相寺410

富士大学⇄和同産業本社  
徒歩25分で行きませ!

今回の担当者とインタビュー相手  
鎌田さん、クオンさん (ベトナム出身)

フィールドワーク(企業訪問)の背景・目的

背景 目的

昨年度のWS内で...

「多文化共生を達成するために必要なこと」  
地域に特化した外国人との交流

① 大学と地域の外国人(住民や技能実習生など)が、どのように交流しているのかを調査する

② 多文化共生の実現に向けて私たちに出来ることを考える

という考えが出た

質疑応答 (主なもの)

① 「日本に来た理由」  
桜を見たことで日本に興味を持った、日本の文化を体験してみたい

② 「来日してから苦労していること」  
・ベトナム料理よりも、日本の料理は味が濃いと感じる  
・毎朝6時半に起きて、ベトナム料理のお弁当を作っている  
・冬は雪と寒さのため、買い物で1回になってしまう

③ 「来日前にしたこと」  
岩手県や花巻祭り、地震について事前に調べた  
ちなみに…ベトナムでは地震は少ないが、それほど怖いとは感じなかった

フィールドワークで感じたこと①

・「言語の壁」への対策が必要  
和同産業では、社員向けの英会話教室を開いている

・「優しい日本語」の難しさを実感  
例: 「土足厳禁」→靴を脱いでから入ってください  
質疑応答中: 苦手なこと→苦労していることに変更

フィールドワークで感じたこと②

・貴重な機会に参加できてよかった  
日常生活の中で外国人と交流する機会は限られている

・日本のアニメの人気の高さに驚いた  
幼い頃は「ドラゴンボール」、今は「鬼滅の刃」を見ている  
↓  
アニメは日本を代表するコンテンツの1つだと感じた

多文化共生の実現に向けた提案

地域住民  
住民同士が積極的に交流できる場を作る  
例えば…地域の祭りで母国に関する出し物の発表や屋台の出店をする

富士大学  
花巻市・北上市在住の外国人を対象に学内見学や授業体験を実施する  
もう1つは…兼務祭(大学祭)で企業や外国人との共同企画を開催する

行政  
日本と海外の文化を同時に学べる体験型イベントを開催する  
そして…外国人に関する問題の解決に向けたルールや施策の検討・実施を行う

最後に...

Cảm ơn  
(カムオン)

ベトナム語で「ありがとう」  
※Google翻訳を使用

以上で発表を終わります。

## 2) 第2回フィールドワークに関する報告(持田、齊藤)

### ○「協同組合のフィールドワークの多文化共生の報告」

富士大学経済学部経済学科

2023E135 持田紗名枝

表題の件につきまして、下記の通りご報告いたします。

#### 【報告内容】

実施日時：2025年9月8日

訪問先：岩手国際経済技術協同組合研修所

対応者：技能実習生(ラオス・ベトナム)

訪問目的：フィールドワークを通じた技能実習生との交流による多文化共生推進のため

#### 1. はじめに

本ワークショップでは、技能実習生との交流を通して多文化共生への理解を深めることを目的としてフィールドワークを実施した。日本国内において外国人と接する機会は必ずしも多くなく、今回の活動は異文化に触れる貴重な経験となった。特に、ラオスやベトナム出身の技能実習生から自国の文化や生活習慣、働く目的などを直接伺うことで、日常の生活では得られない理解や経験が得られた。

#### 2. フィールドワークでの質疑応答

##### (1) 日本で働こうと思った理由について

実習生からは「家族のために貯金をしたい」「日本の働き方を学びたい」

「雪を見たいと思った」など多様な動機が語られた。

##### (2) 日本での生活について

「夜が静かで寝やすい」「日本人が優しい」「想像より厳しくなかった」など、来日前のイメージとの違いも聞くことができた。これは、日本社会への安心感や受け入れの実感につながっているのではないか。

##### (3) 食文化に関して

互いの国の料理を紹介し合うことで距離が縮まり、文化理解が進んだ。日本で好んで食べられるものはラーメンや寿司、焼き肉が人気だ。自国のおすすめでは、ラオスのラープやたけのこスープ、ベトナムのブンポーフェがおすすめ料理として挙げられた。

##### (4) 将来の夢について

「自国でレストランを経営したい」「日本語能力試験 N1 を取得して通訳になりたい」など、明確な目標をもって来日していることが分かり、努力する姿勢に強い印象を受けた。

#### 3. 多文化共生推進への提案

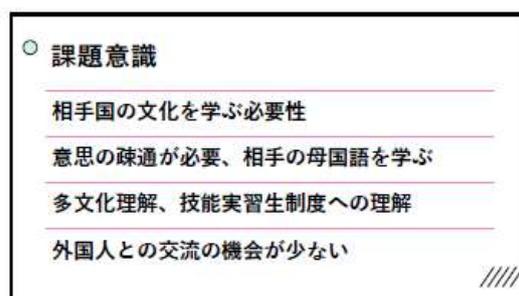
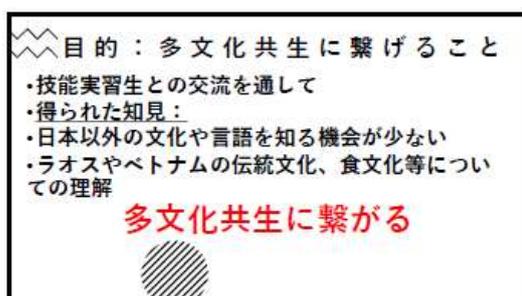
今回の交流を踏まえ、今後の多文化共生に向けた取組としていくつかの提案が挙げられ

る。第一に、地域イベントや大学祭における文化交流の場を設け、技能実習生と地域住民、学生が自然に交流できる機会をつくるのが有効である。第二に、大学を拠点とした言語交流の実施である。日本語や英語だけでなく、ベトナム語やラオス語を学ぶ講義を設けることで、異文化理解を学術的にも深めることができる。第三に、大学・企業・行政の連携強化である。これにより、技能実習制度への理解が高まり、地域としての受け入れ体制の向上につながる。加えて、技能実習生の職場見学を実施すれば、実際の働く環境を知る機会となり、制度への適切な理解促進にも寄与する。

#### 4. 所感

今回のワークショップを通じて、技能実習生が言語の異なる日本かつ岩手県花巻市で目的を持って生活していることを身近に感じ、多文化共生の重要性を改めて実感した。文化や言語の違いを尊重し合える地域づくりのためには、日常的な交流の積み重ねが不可欠である。今後も継続的な活動を通じて、多様な価値観を受け入れる社会に近づけていくことが求められる。

以上



協同組合FW Q&A

【質問】日本で働こうと思ったきっかけ

【回答】貯金をして、家族に送るため。雪が見たいと思った。日本人の考え方や働き方を学ぶため。

【質問】日本に来て良かったことや驚いたことなど

【回答】厳しいイメージがあったが日本に来てイメージが変わった。夜が静かで寝やすい。きれいな所や人が優しいこと。



協同組合FW Q&A

【質問】日本と自国でおすすめや好きな食べ物は？

【回答】ラオスの方⇒日本でラーメンをよく食べる。寿司や焼き肉も食べてみたい。自国では、はラブやたけのこスープがおすすめ。

ベトナムの方⇒日本では米がおいしい。自国では、ブンポーエがおすすめ。

【質問】将来の夢

【回答】ラオスの方、自国でレストラン経営をする。ベトナムの方、日本語のN1を取得して通訳になること。



提案①  
文化交流  
イベント  
の開催・参加

- ・地域のイベント花巻市商工会議所(どてびっくり市等)
- ・富士大学紫陽祭

ラオスやベトナムなどの文化紹介	技能実習生制度の紹介
食文化の紹介 ・試食販売	伝統衣装や工芸品などの紹介・体験

○ 提案②言語交流

- ・場所：富士大学
- ・対象：富士大学生、技能実習生、地域住民
- ・方法：講義、科目履修
- ・内容：日本語、英語、ベトナム語、ラオス語など

▶ 講義での言語学習を通じた異文化交流が可能  
直接的な意見交換の機会の創造に繋げる

○ 提案③大学と企業、行政の連携

広報に地域のイベント等の技能実習生との交流や多文化共生に関する活動を掲載

多文化共生に関する啓発活動の実施

○ 提案④技能実習生の職場見学

場所：技能実習生の職場  
対象：富士大学学生、地域住民

職場見学を通し、技能実習生制度や技能実習生について知る機会を設ける

まとめ

01 地域イベントで異文化交流、異文化理解を促進する	02 言語理解で意思疎通を図る	03 大学、企業、行政の連携で多文化共生に繋げる
-------------------------------	--------------------	-----------------------------

1. はじめに

私は9月8日に岩手国際経済技術協同組合研修所さんへ訪問させていただき、多文化共生についての理解を深めながら技能実習生と交流し、現状の課題や富士大学に出来そうなことなどを考えながら学ぶことができました。そこで今回はそこで学んだことなどを報告させていただきます。

2. 外国人労働者数について

右のグラフは日本の人口推移である。日本の人口は衰退していきのと同時に高齢化率が年々高くなっている。また、一番の問題として挙げられることは、出生率が1.36まで減少していることである。

さらに、右のグラフの外国人労働者の推移を見てみるとコロナの時期があったにも関わらず10年間で約2.5倍になっている。この事実について日本人はもっと危機感を持つべきであろう。日本人の労働力不足が原因で外国人の労働者が増えていると考え、このままだと日本は衰退の道を歩んでいく一方だと思われる。重要視していくべき課題である。

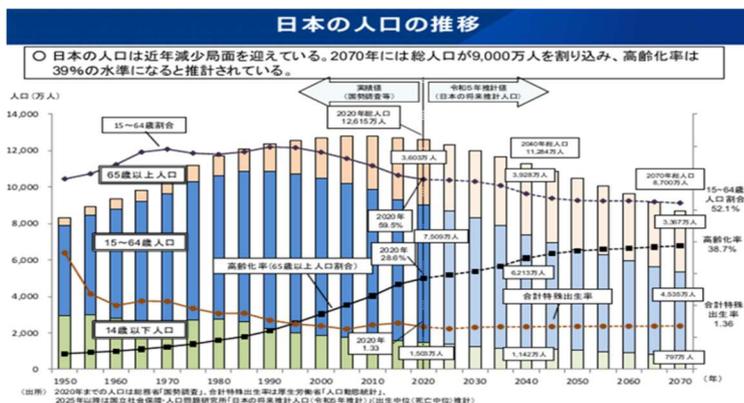
右のグラフのように、岩手県だけで見ても年々外国人労働者数が多くなっていることがわかる。平成27年と令和6年を比べると外国人労働者が2倍以上増えている。そこまで外国人が多くないと思っていた岩手県にもここまで増えていることは注目に値する。今後も問題意識を持つべき分野といえる。

3. 私たちに出来ること

先ほども述べた通り、外国人労働者が増え続けるとともに日本が縮小傾向にあることは事実である。出生率を今よりも高くして日本人労働者を増やしていけば衰退は止められるとも考えられる。しかし、私たち大学生ではどうにか出来る話ではないのが現状だ。そこで、私たちでも出来ることを考えた。それは私た



【図1 (P 8別表 2)】



ちも他の国の文化などを学び、お互いに尊重するべきと言うことである。そこで私は花巻市内にある「岩手国際経済技術協同組合」さんに行き、技能実習生の方々のお話を聞かせていただいた。そこで私が感じたことを紹介させていただく。

#### 4. 技能実習生との交流

まず、技能実習生との交流をして共感した点と違うと思った点がある。共感した点は技能実習生の中に「N1」という日本語検定の合格を目指していることである。日本語検定ではなく別の資格ではあるが、私たちも TOEIC などの英語のテストで高得点を目指しているから共感するところがあった。また、違うと思った点は家族のために日本で稼ぐという技能実習生がいたことである。私も家族のために働きたいという意思はあるが、海外まで出向くという強い意思は自分にはない。そこで私は他文化や言語の壁などを理解して接していくべきだと考えた。

そうすると、技能実習生の母国の文化や習慣を私たちが学ぶ機会が重要になる。富士大生が出来そうなことを三つ提案させていただく。

まず一つ目は、技能実習生に岩手県などの身近な地域に関わる歴史などを富士大生が紹介して、次に技能実習生の母国の歴史を教わって交流すること。

二つ目はそれぞれの国の文化の特徴などを教え合い交流して、お互いの文化についての理解を深めること。

三つ目は実際に岩手県の観光地を一緒に観光すること。

以上の三つのことは富士大生が実行するに当たってとても現実的で、お互いの国の文化や習慣などの理解がより一層深まる行動だと我々は考える。

#### 5. まとめ

私はこの活動に参加する前は多文化共生などについてあまり深く考えていなかった。ただ外国人労働者が増えているという現状をニュースなどで見ていてかなり大変なことになっているとは思っていたが、自分に何が出来るかなど少ししか考えたことがなかった。

少し考えたことも大学生には無理な内容で現実的ではないアイデアが多かった。しかし、今回の活動を通して大学生にも出来そうな現実的なことをいくつか考えられることが出来てとても有意義な活動となった。

この経験を生かして今後も様々なことに関して考えを深めていきたい。

## 技能実習生の現状について

日本の課題とは

齊藤 裕希

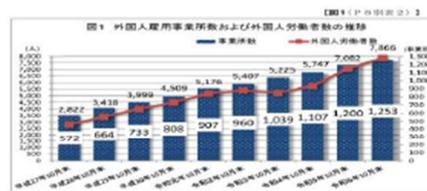
## 日本の人口推移



## 外国人労働者の推移



## 岩手県の外国人労働者数の推移



[https://jika.mhlw.go.jp/wateroudoukyoku/content/contents/gaikokujinikyoyoukyouyounotodokadejyoukyou\\_R6nenndo\\_070131.pdf](https://jika.mhlw.go.jp/wateroudoukyoku/content/contents/gaikokujinikyoyoukyouyounotodokadejyoukyou_R6nenndo_070131.pdf)

外国人労働者が増えて日本が衰退の道をたどっている現状は出生率を今よりも高くして労働者を増やしていけば衰退を止められると考えています。しかし私たち大学生でどうにか出来る話ではないのが現状です。

そこで私たちも出来ること

他の国の文化などを学び、互いに尊重すべき！！

## 技能実習生に共感した点、違うと思った点

共感した点

・N1合格を目指している

自分もTOEICなどの英語のテストで高得点を目指しているため

違う点

・家族のために日本で働く

家族のためには嫌いだと思ってるが海外まで出向くという強い意志が自分にはないため

## 学ぶべき点

他国の言語や文化などをわざわざ学んで日本で働くという強い意思を学ぶべき

自分も異文化や言語の壁などを理解して接していくべきだと考えた技能実習生の母国の文化や習慣を私達が学ぶ機会が重要になる

## 富士大生が出来そうなこと

- ・岩手など身近な場所の歴史などを富士大生が紹介して、次にベトナムとラオスの歴史をそれぞれの国の方から教わって交流する
- ・それぞれの国の特徴的な文化などを教え合って交流する
- ・実際に岩手県の観光地を一緒に巡ってみる

## 参考資料

厚生労働省「我が国の人口について」  
[https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage\\_21481.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_21481.html)

就労ビザ・労働法 | 外国人雇用サポートセンター (2022) 「外国人雇用状況について」 <https://office-shikiji.jp/visa/?p=1539>

厚生労働省岩手労働局  
[gaikokujinkoyoujyokyounotodokedejyokyou\\_R6nenndo\\_070131.pdf](#)

### Ⅲ 多文化共生に関するワークショップからの提案

#### 1. 多文化共生に関するワークショップからの提案

ここでは、3年間のワークショップを通じて、富士大学の取り組みのような多文化共生のまちづくりにおける貢献や、地域への提案について報告する。フィールドワークに参加した学生からのアイデアや、ワークショップにおけるディスカッションを踏まえた成果のみならず、紫陵祭に御参加いただいた地域の方々からの御提案も踏まえている。大学に求められることと、地域全体で取り組むべきことの2つの分野に大別してまとめると以下ようになる。

##### 1) 大学として行えること

交流と相互理解の機会を増やしていくこと、また、単に多文化共生というゴールに向かうだけの取り組みではなく、プロセスを有意義で楽しいものにしようというアイデアが複数出された。

様々なレクリエーション活動を実施することが、多文化共生のまちづくりにおいて、また、地域連携や地域企業と大学との連携という面においても重要なことであると考えられる。地域の企業のボランティア活動に大学生が参加することも交流の機会を増やしていくアイデアとして考えられる。

他には、スポーツや教養・学習といった側面で交流・貢献の機会を増やしていくということが、大学に求められる機会として重要なのではないか、また、大学のリソースを広く学外に役立てることができるのではないか、という面でのアイデアが複数出された。

レクリエーション活動を通じた交流として、代表的なものの一つはスポーツであろう。幸い、富士大学は小規模大学ながらもスポーツ施設については高度なものを揃えており、大学のスポーツ施設を用いて地域の多文化共生に資することができる。

令和7年度の紫陵祭にあわせて花巻市の技能実習生のフットサル大会を富士大学のスポーツセンターにて行うことができた。今回のフットサル大会はあくまでも技能実習生だけが選手となったが、大学生との交流試合をすることも十二分に考えられる。

また、「本格的なスポーツとなると少し敷居が高いな」と考える参加者もいるかもしれない。地域の子供も気軽に参加できるような、ミニゲームのような内容の、簡単な体を動かす企画でも良いかもしれない。

花巻市や北上市は、スポーツを通じて地域活性化をしようという姿勢を明確に示しており、地域貢献や「まちづくり」という面からも支持が得られやすい取り組みであろう。また、令和5年度や令和6年度の調査で示されたように、日本語初級者も含まれる外国人実習生と、大学生や地域住民との間において、「言語」における交流の難度が高い。スポーツはノンバーバルコミュニケーションの面が強く、言語面での障壁を乗り越えやすいかもしれない。

い。

教養・文化面での活動としては、言語や文化を学ぶ活動を学内で展開するアイデアが考えられる。大学を拠点とした言語交流の実施は、相互理解や在住外国人の母国の事情や文化に関心を持つという点で、有意義な成果が得られやすいかもしれない。

ラオス語教員やベトナム語教員を招くという本格的な取り組みとなると困難が多い。正規の授業ではなく、サークル活動のような形で、実習生などの地域の在住外国人の言語の初級レベルを学習するのが現実的であろう。たとえば、挨拶や、買い物、また、ラオスやベトナムの有名な場所や食べ物の名前を覚えるといった程度のものである。

実際にフィールドワークをしてみて気が付いたことであるが、日本の大学生の多くは、ベトナムやラオスの文化について決して詳しいわけではない。ベトナム人やラオス人と交流する際に、日本や岩手についての質問をすることは容易であったが、逆に、実習生の祖国について、また、実習生の日常生活についてなかなかイメージし難い面があった。ベトナム語やラオス語を学ぶ勉強会を設けることで、彼らの文化や日常生活などについても知ることができ、地に足のついた異文化理解につなげることができるだろう。

逆に、大学生が日本の文化を在住外国人の若者に伝える活動も可能である。「どうすれば伝わるだろうか」という点で悩むこともあるかもしれないが、日本の文化や習慣について、易しい内容を伝える会を不定期で学内において開催していくこともできるだろう。

他には、大学生が自身の専攻と関わる知識を技能実習生などの在住外国人に伝える活動をするというアイデアも学生から提出された。たとえば、会計の考え方や日本や岩手の経済について簡単な内容を伝える小規模な勉強会を行う。

これは学生自身の復習になるという利点はもちろんだが、理由はそれだけではない。フィールドワークにおいて、外国人技能実習生も、「近隣の大学では、どのような学習をしているのか」、「日本の大学はどのようなところなのだろうか」という興味を持っていることが明らかになった。日本の学生にとっては自身の復習になり、同時に、技能実習生の興味や好奇心に応えることができるかもしれない。

富士大学として取り組むことのうち、学内活動に限定することなく、学外において活動を展開することもできる。

地域イベントや大学祭における交流の場を設け、技能実習生と地域住民、学生が自然に交流できる機会をつくること。大学・地域企業・近隣の高校などと連携して多文化共生の取り組みをしていきたいというアイデアが複数の学生から提出された。

幾つかの方法が考えられるが、現実的なものとしては、在住外国人と共に岩手県内の日帰りのミニツアーを行うというアイデアが出された。在住外国人がよく知らない岩手県内の魅力的な場所や、高価ではなくともおいしい名物などを楽しむことができれば、在住外国人に地域をより愛してもらうことができる。県内出身の学生側にとっても、地域の魅力を在住外国人にわかってほしい、伝えたい、という欲求がある。ミニツアーといっても、予算がかかる小旅行ではなく、市内のウォーキングのような低予算で済むものから始めることでも

きる。

## 2) 地域で取り組むべきこと

交流の機会を増やしていくことに焦点を当てて、いくつかの提案をすることができる。

地域の祭りや催しなどで、地域住民の国籍に関わらず積極的に交流できる場を設けることが重要である。地域イベントにおける文化交流の場を設け、技能実習生と地域住民、学生が自然に交流できる機会をつくるのが有効であろうという意見が複数の学生から出された。具体的には以下の様なものである。

花巻まつりのような地域のお祭り・催しにおいて在住外国人・学生・近隣地域の人々の共同で何かをつくってみたり、共同で出し物をしてみたりする、というアイデアが提出された。

花巻市内で既に行われている取り組みとして、「多文化サロン」というものがある。国外の方に講師をしていただき、外国文化の紹介を地域の人々に行うというものである。多文化サロンに大学生をはじめ、若い人が来ればより盛り上がるという意見が近隣の地域の方から出された。

より実利的なアイデアもあり、ゴミ分別など、在住外国人にとって「少し難しい」と感じる生活上の問題についての説明会を行うというものである。レクリエーション活動としての面はあまり強くないため、果たして継続的に取り組むやる気が続くかどうか、という問題はある。

近隣の住民や企業と協力して、技能実習生と学生がボランティア活動に共同で取り組んでみる、というアイデアも出された。この点については企業側からも歓迎の姿勢があり、学生の意志や日時の都合さえつけば可能である。ボランティア活動といっても高度なものではなく、美化活動や資源回収といった難度の高くない活動である。

たとえば、和同産業株式会社では、新人教育の一環として、地域の美化活動を行っている。もし、富士大学の学生が希望するならば、新人の技能実習生と共に美化活動に参加しても良いという姿勢を示して頂いている。ただ、4月となると、大学も新学期がはじまったばかりの時期であり、学内日程などとの日時の摺り合わせといった面では困難もあるかもしれない。

地域・在住外国人・大学生が一体となる活動を目指すことが「多文化共生のまちづくりに向けた富士大学の取り組み」に求められる姿勢といえる。また、取り組みにおいて、技能実習生などの外国人参加者側からも、大学生側からも「面白そうだ」「やってみたい」と思える取り組みにしていく必要がある。

富士大学の学生は、地域の企業や高校などと連携してみたいという欲求が強い傾向がある。また、遠くからいらした在住外国人の方々に、岩手県の良さを伝えたい、地域の魅力を共有したいという欲求も強い。このような学生の希望を活かしながら、同時に、技能実習生をはじめとする在住外国人の若者の期待に応えることができるような活動ができれば、たとえ小規模なものであっても有意義な活動となるであろう。

## 2.多文化共生のまちづくりに向けた富士大学の取り組み

「多文化共生のまちづくり」において、県南地域における学術・スポーツ・青春キャンパスとしての富士大学の可能性を活かした取り組みについて提案する。特に在住外国人の若者との交流機会を広げ、だれにとっても住みやすいまちづくりに向けて富士大学が取り組める事項を探っていく必要がある。

フィールドワーク実施前には、「住外国人が富士大学や地域の若者に対してどのような意識やイメージを持っているのか」、という問題意識があった。フィールドワークの結果、外国人技能実習生も地域の大学生や日本の文化に関心を持っていることが明らかとなった。また、機会さえあれば、近隣の大学を見学してみたいという希望を持っており、これらの点で、交流機会の増加を狙う上で、非常にポジティブな状況にある。

その上で、富士大学が提供できるリソースと活動形態を考えていく必要がある。地域の学術とスポーツの拠点であるという点を活かした取り組みを行うことが最も現実的である。学生から提案のあった語学・文化講座による交流や、スポーツなどのレクリエーションを通じた交流を進めていく価値があるものと思われる。

また、これは、交流機会の増進という面はもちろん、学生の教育や人格陶冶・社会人基礎力の向上といった大学本来の役割から見ても重要であろう。

令和7年度に岩手国際経済技術協同組合主催の技能実習生と富士大学生とのフットサル交流試合が行われた。このような取り組みは、技能実習生側が継続を希望している限り、今後も取り組んでいくべきであろう。

岩手県は課題先進地域ということもあり、大学生をはじめとする若者が社会や地域に参画しようと試みるだけで歓迎していただける傾向がある。そして、富士大学の大学生も、地域課題への関心が高い傾向が強い。学生の多くは、地域・近隣の企業・行政・他の教育機関等と連携したい、可能であれば地域活性化に貢献したいという社会参画の欲求や貢献意欲を強く持っている。同時に、在住外国人の若者も、地域や日本のことを知りたい、職場以外のことにも触れて視野を広げてみたいという意欲を持っている。

他方、単に、「若い人が来てくれてよかった」「人が集まって盛り上がった」ということに留まる活動では大学として取り組む意義があるのかどうか。やはり、それ以上の意義のある活動にしていかなければならない。大学としての取り組みでは、地域の学術・文化・スポーツの振興に資するものであるとともに、若者の能力向上や社会参画のための力や意志を高める活動を求めていく必要がある。

この様な面で、技能実習生をはじめとする在住外国人の若者と語学・文化・スポーツなどを通じて連携する機会を、規模の大きなものではなくとも、継続的に作りだしていくことが肝要であろう。

終わりに 一富士大学多文化共生のためのワークショップをふりかえって一

本報告書は令和7年度の岩手県南広域振興局・富士大学共催の「富士大学多文化共生のためのまちづくりワークショップ」の1年間の活動を取りまとめたものである。ワークショップは令和5年度から3年間にわたりその活動を開始し、今年度が最終年度である。本書の記述と多少重複するところもあるが、過去3年間の活動の目的と成果を整理し、本書のむすびとしたい。

「富士大学多文化共生のためのまちづくりワークショップ」は本格的な多文化共生社会の到来を背景として令和5年に発足した。同年6月22日付の協定書によれば、本ワークショップは、岩手県南地域における多文化共生の未来につながる主体者の育成を目的とし、①異文化の外国人を地域に積極的に受け入れるための市民のコミュニケーション能力及びスキルの向上、②若者の自主的な研修、イベント等への参加により得たコミュニティ形成能力を多文化共生のまちづくりへ活用すること、の2点を目標としていた（巻末資料参照）。

令和5年、6年度は多文化共生のまちづくりの未来につながる知見の獲得の一環として花巻、北上地域を中心とする岩手県南地域における大学生、高校生、住民の多文化共生に関する意識調査及び外国人自身の多文化共生意識調査を大規模アンケート方式によって実施した。その詳細は、各年度の報告書によられたいが、主な内容を特記すれば、①多文化共生に関する意識は低くはないが殆どの人々の日常生活では外国人との交流はない。②しかし、外国の文化や風習、語学に関する関心は高く、少なくない人々が交流を求めている。③日常生活ではゴミや騒音など生活に関わるルールの学習が課題となっていることが明らかとなった。他方、①外国人にとっても日本の文化や伝統、日本語への関心は高く、積極的な交流を求めていること、②また大学での学習への意欲も高く、富士大学を学びの場として活用／見学したい、③日常生活では病気になった際の不安が大きいことも明らかとなった。

外国人アンケートではまた県南地域に共住する外国人の圧倒的多数は、10～20代の若者であり、3年間以下の居住期間、国籍別ではベトナム、インドネシア、ミャンマーなどの東南アジア系の人々が多く、技能実習生が外国人の大勢を占めていることが明らかとなった。ここから、こうしたいわば短期滞在型の外国人との交流をいかにして図っていくかが地域における多文化共生のまちづくりの具体的課題の一つであることが明らかとなった。

令和7年度は、地域における技能実習生との交流を目的として、和同産業、岩手国際経済技術協同組合にワークショップ参加者が聞き取り調査を行った。詳細は、本報告書第2章及び第3章によられたいが、技能実習生の多くは日本のアニメや文化への関心が高く、それが日本を選択した一つの要因となっていること、帰国後は自ら起業したり、進学するなどそれぞれに明確で明るい将来を夢見ていること、日本は清潔で明るく住みやすいこと、地域の大学である富士大学の授業を受講してみたいなど向学心も高いことがうかがえた。本学学生からはスポーツや食事会を通じた交流を図るとともに、「やさしい日本語」を通じたコミュニケーションの大切さが理解できたとの意見が多く出た。

次年度以降は本年度の調査で得た知見と人的つながりを基礎としてよりやさしい日本語を活用して様々な形での多文化共生の取り組みを進めていくことが課題となっている。ワークショップという場は今年度限りではあるが、この3年間で得た知見を整理し、後続の学生たちに継承していくこと、地域の住民、高校生とも一緒になって多文化共生のまちづくりに寄与する学習、啓発、コミュニケーションの場の創出が求められている。そのためにも本年度の報告書を含め、過去3ヶ年分の報告書が十全に活用されることを望みたい。また、本センター並びに富士大学は次年度以降も新たな多文化共生のためのまちづくりに寄与する取り組みを進めていきたいと念願しているが、岩手県県南広域振興局にも変わらぬご支援を頂けるよう切に要望する。

最後に、「富士大学多文化共生のためのまちづくりワークショップ」に参加し、多大のご支援を頂いた関係機関のお名前を紹介し、深甚の謝意を表したい。

「富士大学多文化共生のためのまちづくりワークショップ」への参加・支援機関（順不同）  
花巻市国際交流室、北上市国際交流ルーム、公益財団花巻国際交流協会、奥州市国際交流協会、花巻市ホームステイ協会、公益社団法人 JOCA 仙台（青年海外協力協会）、花南振興センター・花南コミュニティ会議、和同産業株式会社、岩手国際経済技術協同組合、花巻農業高等学校、北上翔南高等学校、他多くの高校生、地域住民、学生のご父兄、一般市民の皆様。ありがとうございました。

令和8年3月9日

富士大学国際センター長  
中村良則

<資料>

1. ワークショップ参加者数

第1回（令和7年6月21日）			
富士大学生（留学生含む）	9人		
県南広域振興局	2人		
富士大学教員	3人	計	14人
第2回（令和7年7月28日）			
富士大学生（留学生含む）	5人		
奥州市国際交流協会	2人		
県南広域振興局	2人		
富士大学教員	3人	計	12人
第3回（令和7年9月27日）			
富士大学生（留学生含む）	5人		
県南広域振興局	2人		
富士大学教員	4人	計	11人
第4回（令和7年10月11日・紫陵祭）			
富士大学生（留学生含む）	6人		
高校生	1人		
花巻市国際交流室	2人		
花巻市国際交流協会	1人		
和同産業・岩手国際経済技術協同組合	2人		
一般	6人		
県南広域振興局	2人		
富士大学教員	4人	計	24人
第1回から第4回までの延べ人数			
富士大学生（留学生含む）・高校生	26人		
地域（花巻市・交流協会・企業・組合）	7人		
一般	6人		
県南広域振興局	8人		
富士大学教員	14人	計	61人

## 2. フィールドワーク参加者数と事前の質問案等

### 第1回フィールドワーク

場 所：和同産業

日 時：令和7年8月23日、13時30分～15時30分

参加者：技能実習生 1人（ベトナム）

富士大学生 2人

和同産業 1人

富士大学教員 3人

### 事前の質問項目案

- ①どんな思いを持って日本に来たのか
- ②日本に来る前と後で変わったこと
- ③日本に来てから文化の違いを感じたことはあるか、また、感じたタイミングはいつか
- ④日本に技能実習生として来て、なぜ岩手県の花巻市で、和同産業で働こうと思ったのか
- ⑤和同産業で働いてよかったことや嬉しかったことを知りたい
- ⑥富士大生と交流会をするとしたらどのようなことをやりたいか
- ⑦地域でどのようなイベントや取り組みがあれば交流に積極的に参加したいと感じるか。

### 提案

- ①「地域住民」としてではなく、「大学生」としての我々とやってみたいことはあるか。  
(例：スポーツや遊び等)
- ②体験形式で互いの文化を比較するイベント開催
- ③和同産業の庭で技能実習生や社員の方々とのバーベキュー会

### 第2回フィールドワーク

場 所：岩手国際経済技術協同組合

日 時：令和7年9月8日、14時00分～16時00分

参加者：技能実習生 15人（ラオス10人、ベトナム5人）

富士大学生 4人

岩手国際経済技術協同組合 4人

富士大学教員 3人

### 事前の質問項目案

- ①どんな思いを持って日本に来たのか（高橋）
- ②日本に来て働こうと思ったきっかけについて（大森）
- ③日本に来て、やってみたいことについて（大森）

- ④技能実習先に日本の岩手を選んだ決め手は何ですか。(齋藤)
- ⑤技能実習を行う上で大変なことは何ですか。(齋藤)
- ⑥技能実習を経て、得た技術をどのようにして将来に活かしますか。(齋藤)
- ⑦日本に来て色々大変だったことが多いと思いますが一番大変だったことは何ですか?)
- ⑧日本に来てどのようなものに驚きましたか？(齋藤)
- ⑨日本の文化で面白いと思った文化はありますか？また、好きな文化はありますか？
- ⑩自分の国で特徴的だと思う文化や風習を教えてください
- ⑪地元で有名な日本のアニメ・漫画は？
- ⑫将来の夢・どうなりたいか
- ⑬日本に実際に来てみてよかったこと

### 3. 「県南広域振興局と富士大学の多文化共生社会推進の取組に関する覚書（抄）」

県南広域振興局と富士大学は、多文化共生社会の実現を目指し、そのための諸課題の解決と多文化共生地域経済社会の持続的発展を図ることを目的に、「多文化共生のまちづくりワークショップ」の実施に関する覚書を締結する。

1 両者は、以下の各号に係る事項について連携・協力する。

#### (1) 目的

富士大学における留学生を含めた異文化交流の歴史を踏まえ、県南地域の若者に「多文化共生のまちづくり」に資する知見（興味・関心、考察、そして課題解決力と具体的な行動力）を提供することにより、外国人を含めた多文化共生のまちづくりの未来につながる主体者を育てることを目的とする。

#### (2) 定義

県南地域の若者とは、花巻市、北上市、遠野市、一関市、奥州市、西和賀町、金ケ崎町及び平泉町に居住または就学する高校生・大学生を指す。

#### (3) 目標

- ①異文化の外国人を積極的に地域に受け入れるため、異文化理解の必要性を啓発し、若者を中心とした市民のコミュニケーション能力及びスキルを育成する。
- ②若者が自主的に多文化共生のための研修、考察、イベント企画へ参加することにより、外国人を迎え入れるコミュニティを形成する能力を培い、地域のまちづくりに活かす。

#### (4) ワークショップの内容

- ①対象は、県南地域の若者及び外国人居住者とする。
- ②このワークショップは、多文化共生社会を実現するための実践の場とし、その成果は地域住民と共有するものとする。
- ③連携・協力の方法、具体的実施内容、成果の利用については、別途協議するものとする。

(以下略)